The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	海外報告(2)　クロードの鏡
Author(s)	藤田, 治彦
Citation	デザイン理論. 1987, 26, p. 108-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52554
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

（海外報告）

クロードの鏡

藤田治彦

7月24日から8月19日まで，16，17世紀ヨーロッパ絵画の調査研究のために，イギリス，ベルギー，オランダ，フランス，そしてイタリアの5ヶ国を巡る機会を得た。主たる研究対象は「ピクチャレスクの別称のごとき」クロード・ロラン（Claude Lorrain，1600-1682）による風景画で，鹿島美術財団の助成によって実現された。

クロードはその生涯のほとんどをローマでの制作に費やしたフランス生まれの画家だが，18世紀から19世紀にかけて，その作品の評価はイギリスで更に高まり，現在ではむしろアングロ＝アメリカ圏にそのコレクションの中心がある。筆者がクロード研究の準備を始めたのは8年前のアメリカ留学中のことで，18，19世紀の（絵画ではなく）造園，建築など，環境デザインに関わる史料に多くの「クロード」の名を見出し，アメリカ国内にあるコレクションを訪れ，その理由を知ろうとした。その後も，機会ある毎に，欧米の美術館ではクロードの絵に向うよう心がけていたが，今回ようやく，かなり徹底したクロード研究のための調査旅行が上記財団や所属機関の関係者の御支援により可能となった。ここでは，クロードの絵については語りつくせないので，「クロード鏡(Claude Glass)」について簡単に記し，その報告としたい。

「クロード鏡」とは，広大な風景を小さく映し出す僅かに凸面状をしたガラス質鏡板で，どちらかと言うとアマチュアの画家によって，あるいは風景愛好

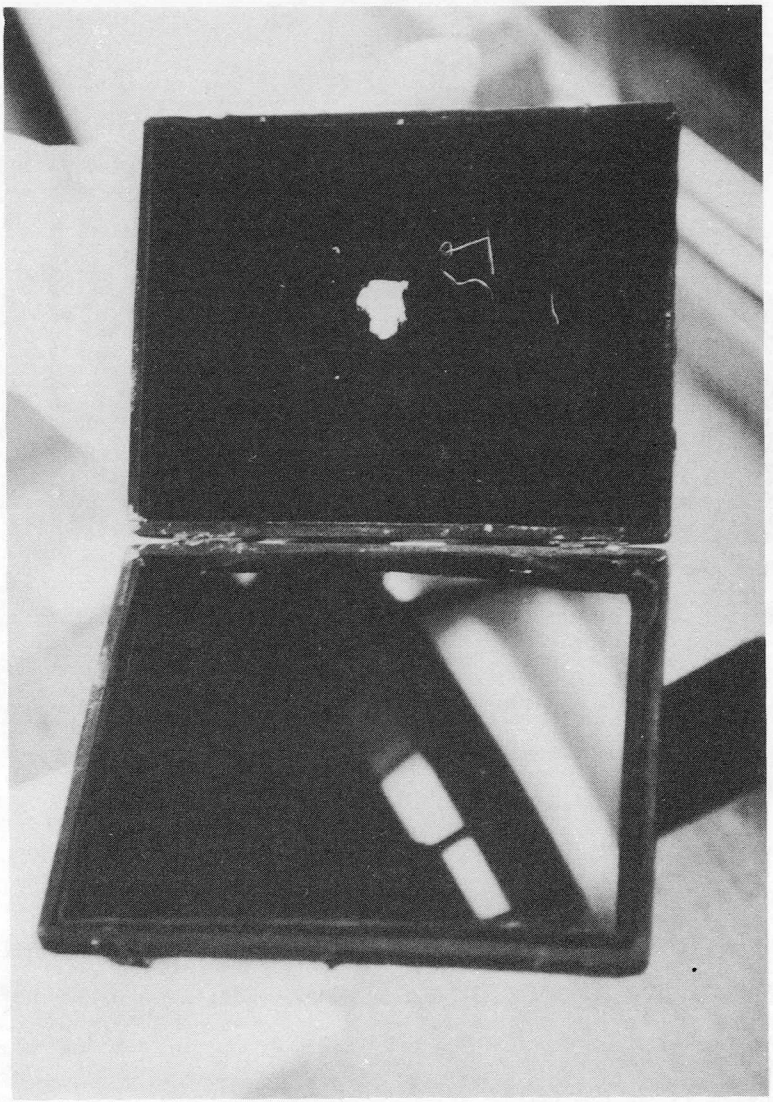

図1　クロード鏡の一例（ケース付）

家によって，18世紀後半のイギリスで多く用いられた。今回の調査では，ポール・メロン英国美術研究センターのマイケル・キットスン所長の適切な助言に

図2　Hof vijver とマウリッツハイス美術館（ハーグ，オランダ）

より，多くの「クロード鏡」に触れることができた。「クロード鏡」は「クロード・ロランが発明して使用したものといわれる」（ゲッテンス，スタウト共著，森田訳『絵画材料事典』）と解説されたりもしているが，その証拠は無い。

「クロード鏡」には，今回確認した限りでも５種類あり，実際にはそれ以上の種類があったと推定しているが，基本的には黒色の鏡だと言ってよい。従って，銀鏡と異なり，そこに映る風景は，細部の識別が困難となり，主要な構成や光と陰影との関係が強調された像となる。「クロード鏡」は，クロードが発明したからではなく，それを用いることによって「クロード調」の風景画を描くことができるという意味で，そう呼ばれた。

しかしながら，それはクロードの風景画における光の把握，あるいは構成に魅せられた近代人が作り上げた「クロード調」の絵のイメージでしかなかった。筆者が「クロード鏡」に映してみた風景は，クロードの描く風景とは根本的に異質なものだった。それは，17世紀のイタリアではなく，20世紀イギリスの風

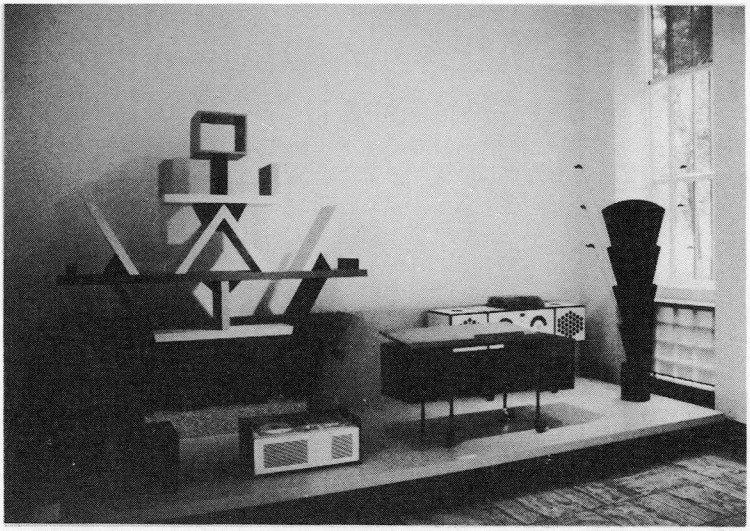

図3　ボイマンス・ファン・ベーニンゲン美術館（ロッテルダム，オランダ）デザイン部門

景ゆえに異質に見えた，ということ以上のものであった。

ベルギーではブリュッセル，アントワープ，ゲント，ブリュージュ，オーステンデの各種コレクションを尋ね，オランダではアムステルダム，ハールレム，ユトレヒト，ハーグそしてロッテルダムを訪れた。ロッテルダムのボイマンス・ファン・ベーニンゲン美術館のコレクションは幅広く，クロードや同時代ネーデルラントの風景画からソットサスによる家具などのデザインにまで及んでいる。ここでは，もはやメンフィスも「時代家具」への仲間入りを果したようだ。アアルトやイームズに関しては言うまでもない。むしろ，クロードの描く風景画も現代のランドスケープに連続しているのだと再認識することのほうが有意義であろうか。

18世紀の人々は，大自然を小さな黒い凸面鏡に映すという，おかしな風景の見方をしていたものだと笑うまえに，われわれ現代人の「クロード鏡」である各種の視覚伝達媒体が如何に日常のランドスケープを見事に歪めているかを考えてみるのも良いだろう。